

# 船宿寺における花供養法要と柴燈護摩供養の 僧服について

## The Canonicals Used in the Flower Mass and the Saito Goma (Holy Fire) Service at Senshukuji Temple

青海 邦子  
Kuniko SEIKAI

### 1 はじめに

毎年5月3日に船宿寺では花供養法要・柴燈護摩供養が、寺の連綿と続く伝統行事として催されている。

私は10数年前にはじめてこの伝統行事に接して以来毎年のように参加し、華やかななかにも壮厳な行事に魅せられて来た。そして、行事を司る導師や僧侶の被着される僧服にも関心を寄せてきた。

今回、船宿寺のご協力により花供養法要・柴燈護摩供養で用いられる僧服と一般の僧服との共通点や相違点、また地方、他寺で行なわれる花供養行事との比較についての調査、研究を行ったので報告する。

### 2 調査結果と考察

#### 2・1 船宿寺の由来と歴史

船宿寺は奈良県御所市の南部に位置し、今から1200有余年前の神亀2年(725・奈良時代)に葛城村佐味の高宮寺の徳光禪師<sup>(註1)</sup>により、具足戒<sup>(註2)</sup>をさずけられた行基(668~749年・奈良時代の僧侶)が、この地に来られ薬師瑠璃光如来<sup>(註3)</sup>を祀ったのが始まりである。心身の病、苦悩を救う薬師如来を本尊に祀ったので、この地の山号を医王山と呼んでいる。寺に伝わる古文書には、葛城の地において修業していた行基の夢の中に「船形の大きな岩があるから、その岩の上に薬師如来をお祀りするよう」とお告げがあり、夢から醒めた行基が、東の山の中に岩を見つけ、そこに御仏を祀り船宿寺と名づけたとの伝えが残されている。現在その岩場には巖舟明神<sup>(註4)</sup>と観世音菩薩<sup>(註5)</sup>が祀られ、新四国八十八番札所に指定されている。平安時代以降は弘法大師への信仰とその道場として今日に到っている。

花供養法要と柴燈護摩供養は毎年5月3日に行なわれる船宿寺における最大の行事である。当寺ではこの行事に釈迦如来の誕生会と薬師悔過<sup>(註6)</sup>の法要とのふたつの意義を含めて営んでいる。

## 2・2 花供養法要と柴燈護摩供養の由来

船宿寺の花供養法要は寺の創建よりみて平安時代以降営まれていたと考えられるが、南北朝時代の争乱と戦国時代の争乱の二度にわたる当地の戦乱焼失により古記録が失われ、それが行われていた正確な時期は定かでない。しかし現在当寺にある釈迦誕生仏と花御堂（図1）の造立より勘案すると、花供養法要が江戸時代には盛んに営まれていたことが推測できる。例えば、花御堂の裏の墨書には、「葛上郡五百家村医王山船宿寺什具第十五世本浄造・干時文政八酉四月八日・奉為報恩謝徳也」との記述がなされていることや仏教行事歳時記・花祭り<sup>1)</sup>の項の記載「仏教の花祭りが野山の自然の花で飾られるようになったのは平安時代からである。のみならず女性と子供の祭りとして楽しめるようになったのは、江戸も後期に入ってからのものである。（取意）」といったことを考え合わせると、船宿寺の花供養法要の創設と上述の時期がほぼ一致しているように思われる。

花供養では花（自然、森羅万象）の供養と合わせて人の「心」をも供養するといわれている。自然界では人も花もすべて平等であるという考えからである。

ついで、柴燈護摩は修験者の山伏によって焚かれる。修験道は日本の伝承的山岳信仰の一形態として奈良時代に役小角（えんのおづぬ）を祖として生まれたと言われ、同時代に唐より伝来した密教の影響を強く受けて広まっていった。修験道の重要な「行」として成立した柴燈護摩は多くの密教系寺院で取り入れられていることから、その由来は首肯しうるものである。葛城山麓は修験道が盛んな土地柄であるがこれは、修開の役小角が御所市茅原の出身であることが大きく影響していると思われる。



図1 釈迦誕生仏と花御堂

## 2・2 花供養法要と柴燈護摩供養の構成

花供養は4月8日の釈迦如来の誕生会で営むのが本来であるが、花供養の精神には自然の命そのものへ捧げる供花の意も含んでおり、丁度当寺の平戸つつじ、ぼたん等の花の見ごろに合わせて毎年5月3日に行われている。花が咲きみだれている境内を詠歌講、修験者の山伏・僧侶・檀信徒の順に行列がねり歩く（図2）。5年ごとには稚児の成長と幸せを祝って正装した稚児が先頭に並ぶ。

本堂の前では導師や僧侶たちが整列し散華を営む（図3）。散華とは花籠に盛られた生

船宿寺における花供養法要と柴燈護摩供養の僧服について

花や紙製の蓮花の花弁をかたどった花(蓮弁)を散らして、仏を供養し、本堂の外陣を荘厳にする作法である。つづいて本堂に入ると、本尊の薬師瑠璃光如来の厨子の前の大壇(図4)には、色どりも彩やかな多くの花が飾られ、いつも厳かな内陣がひときは華やかになる。その前で「花供養法要次第」<sup>2)</sup>のつとり修法が行なわれる。法要の終る少し前に、修験者の山伏一行は本堂の広場に築かれた護摩壇(図5)の周囲に集り「法弓の儀」が行われる。柴燈護摩の前作法であるこの儀礼は、弓矢を使って東西南北・中央さらに鬼門の六つの方角に青・赤・白・黒・黄・紫の矢を放ちさまざま魔の所作を絶ち、護摩修法の道場を結界<sup>16)</sup>しようとするものである。また、「法剣の儀」の剣の咒力(じゅりよく)によって護摩壇が一層浄められる。引きつづいて、「柴燈護摩式作法」<sup>3)</sup>(図6)のつとった修法が行なわれる。境内では護摩壇の火は勢いを増してゆく(図7)。その護摩壇に向って参詣者のなかにも読経する人も多く、本堂の内と外とが、懺悔滅罪の果てにいいよいよ浄化されてゆく。

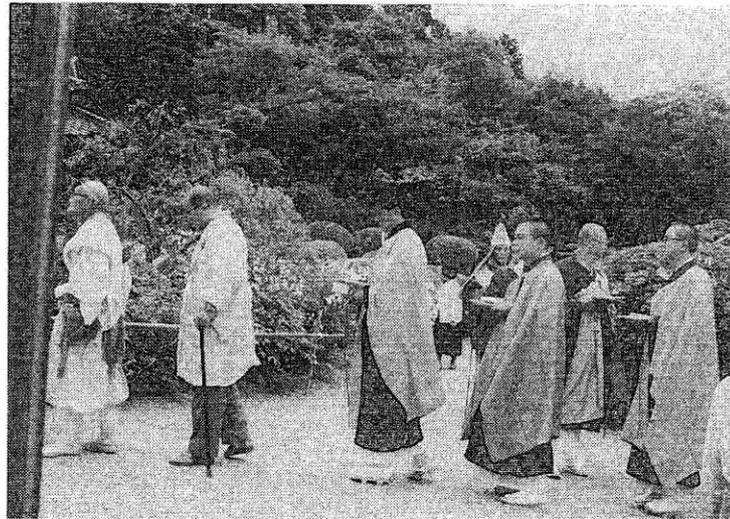


図2 花供養の行列形態



図3 本堂の前で整列した導師や僧侶たち

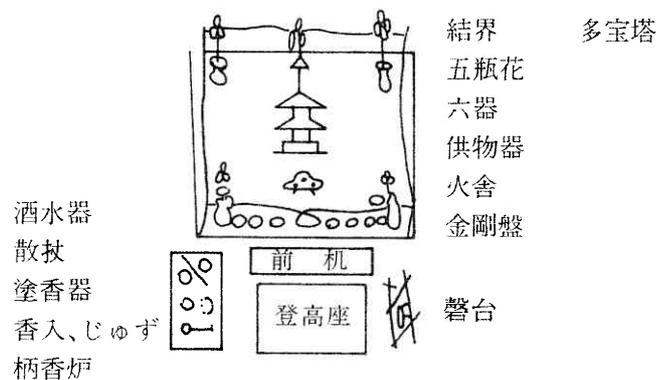


図4 大壇

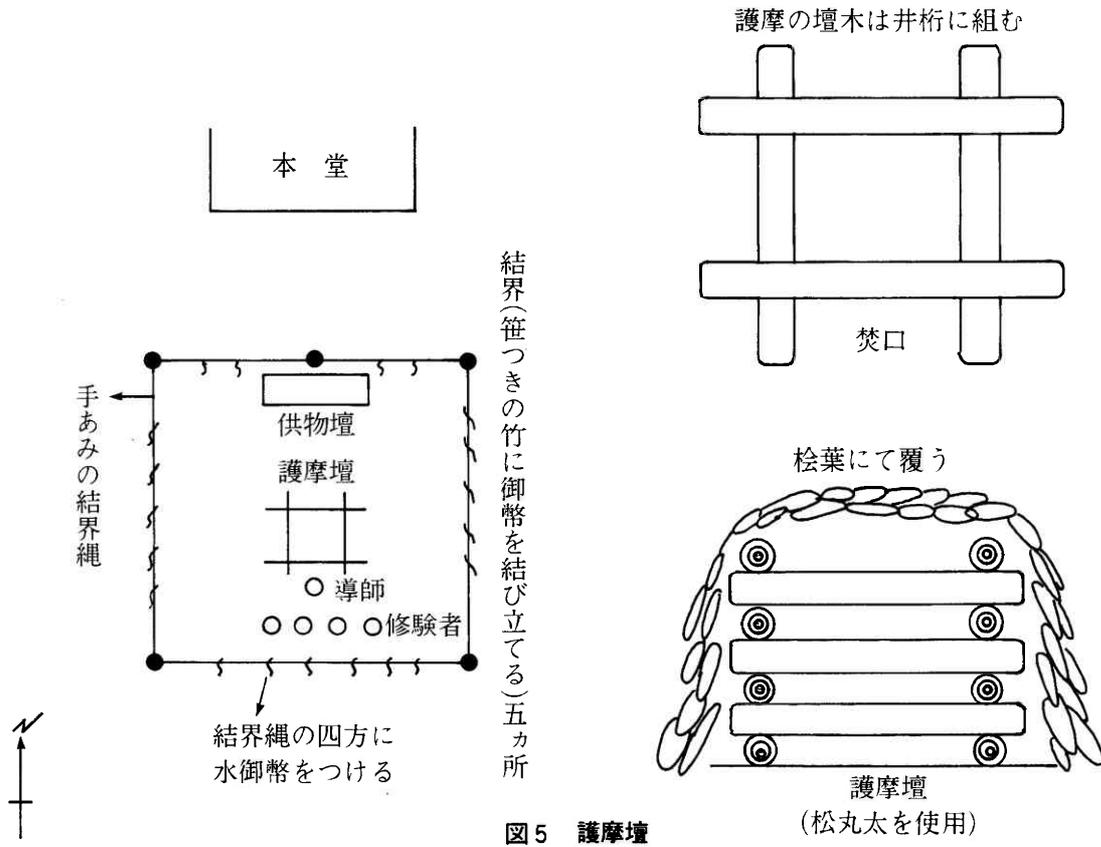


図5 護摩壇



図6 「柴燈護摩式作法」を修法している修験者の山伏たち

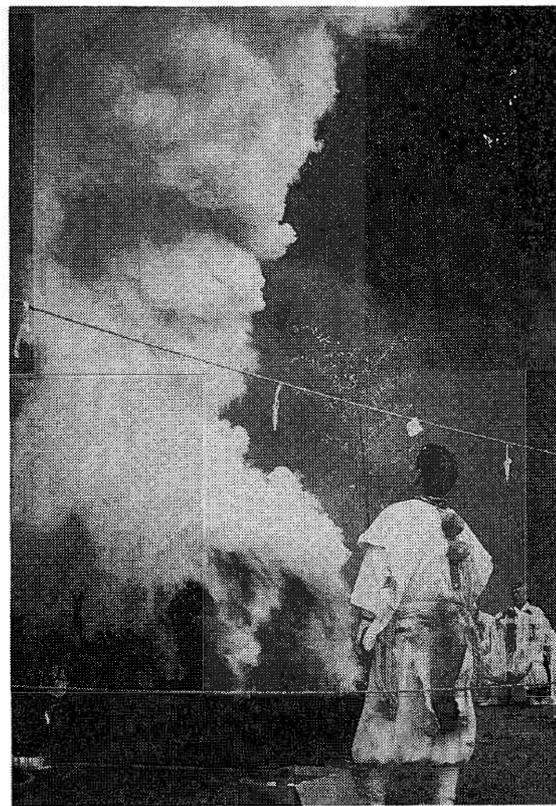


図7 護摩壇に火がもえさかる

## 船宿寺における花供養法要と柴燈護摩供養の僧服について

## 2・3 僧服の変遷について

法衣史<sup>4)</sup>によれば「法衣とは『如法衣』の意で、『法』とは『仏法』であり、『仏法にもとづく衣』のことである。『衣』とは『身体を被覆する布』すなわち、『仏を説きたまう教之にしたがって身体を被覆する布』、また『仏弟子としてその教理を信奉し遵守し布教する僧の服装（取意）』』というのである。

そこで法衣を区分すると袈裟・袈裟を除く襯身のもの・袈裟・襯身衣などのさらに下につけるもの、頭につけるもの、附属のものとして5つに分けられる。

ところが現在では、袈裟と内衣・袴・帽子類を除き、衣類として一番上に身につけるもののみを「ころも」と呼ぶのが、一般であるが、これを狭義に法衣として称する場合もある。この時には「けさ」、「ころも」と併称されている。

次に、僧服の大きな変遷について、簡単に記述する。当然のことながら仏教史とも密接な関連がある。

日本の仏教は6世紀頃に百済より伝えられた。当初伝持者はすべて渡来人であり、その僧服は、形式はすべて中国の漢、六朝の様式のまま伝来し、漢系あるいは朝鮮系の人達によって着用されたのがはじめとされている。

その後、聖徳太子が女帝推古天皇の摂政となり、日本という国号をたて、朝廷を確立させるとともに、仏教興隆に力を尽くしたのである。聖徳太子の時代が仏教尊崇をもってはじまったことは、次に述べる僧侶の衣服である法衣史を語るうえで忘れてはならないことである。

日本における最初に明文化された服制は、推古天皇11年(603年)制定の冠位12階である。位にしたがって冠の色が決められた。さらに推古天皇16年には冠の色と服の色が同じになる。

冠から衣服へと服の制度が展開し、文武天皇の大宝元年(701)に律令の制定によって衣服令が定められた。この大宝の衣服令は詳細な内容は伝わらなかった。

天明天皇和銅3年(710)には奈良に都が遷された。仏教については、聖徳太子よりひきついで仏教保護政策が聖武天皇によって行なわれた。こうした中、天正天皇の養老2年(718)に大宝の衣服令が修正され、養老の衣服令に改正された。袈裟史<sup>5)</sup>によれば、養老の衣服令には僧尼令が発布され、その中で僧尼はいかにあるべきかが明示されている。その中の僧服についての箇所を要約すると、「僧尼は木蘭色、青碧、阜色、黄および壊色等の衣を着ることを許す。余の色及び綾・羅・錦・綺(いずれも高級な織物)は用いてはいけない。これに違反する者は十日間の苦役にする。又俗衣を着たならば百日の苦役にする」というように法制化により厳しい罰則が設けられているのが特徴である。木蘭・青碧、阜、黄および壊色のものだけでなく、地質も、織文様のあるもの、高級な薄くすけた地質のもの、三色以上の文様を使った織物、糸を編んで組みものとしたものなどの高級品は使ってはならないと規定されている。すなわち麻や縄といった素材で質素なものに限ると記され

ている。ここで言う俗衣とは衣冠をつけることを意味している。したがって俗衣を着たならばという意味は、朝廷出仕の官吏の服装を身にするなどの意味である(取意)』とこと細かに衣服の素材・形態について定められているように、権力からの圧力により僧服に対する規制と共に、僧尼達への法によるしめつけと支配が強まった時期でもあった。8世紀の初めの奈良朝前期の頃は僧尼の社会的な地位が現在に比べて低かった一時代である。

聖武天皇神亀元年(724)より桓武天皇延暦24年(805)までがいわゆる奈良仏教の全盛期であり、養老の衣服令の中の僧尼令に出されたような禁令の線は崩れ、仏教はいよいよ国教としての地歩を固めるのである。日本国中の国ごとに国分寺が建立され、東大寺は総国分寺として、また僧寺と尼寺との区別も行われた。国分寺の制定は、政治と宗教との近接というよりさらに進んで政教一致を意図したものである。

次に、称徳天皇の天平神護2年(765)には、僧侶である弓削道鏡が法王の位を授けられた。法王の地位は今日の行政の執行最高官に相当する位である。道鏡は法会執行者としての立場から、従来朝廷厳儀使用の礼服を僧侶にも被着できるようになった。さらに、僧侶が被着する色衣として、朝廷より禁色されていた緋・紫が許され使用された。したがって、道鏡の栄進が僧服の上に非常に影響を与えた事は、見逃すことの出来ない事実であり、また僧侶の俗世間での地位が、この時ほど高くなったことはかつてないのである。この時代の法衣が正倉院御物<sup>6)</sup>として一領のこり袈裟付羅衣と称され当時のまま残っているのである。

この時の一般の僧侶の法衣としては、上衣には褌衫と云われる背が割れた仏教教理に依るものと、下半身には裙をつけたものが被着されている。

ついで、この当時の袈裟について調べると、袈裟には、大衣・中衣・小衣の大きさがあり、この三つを総称して三衣という。大衣は二十五条から九条まで僧伽梨(saṅghāṭi)とし、中衣は七条で鬱多羅僧(uttārasaṅgha)、小衣は五条で安陀衣(antarvāsa)と定められている。

袈裟は必ず田相という方形の部分と、縁(条葉)という縦横を区画する部分からなっている。これは、いくつかの布を綴り合せて一つの衣を作っているのである。

この時代の袈裟は「如法衣」と「納衣」からなり、納衣はさらに「甲袈裟」と「糞掃衣」の二つに区別される。

「如法衣」とは、釈尊時代から戒律の定めに従って法の如くに縫製された袈裟という意味であり、色合についても如法のもの、すなわち木蘭色等の壊色の一色を用いる。

形も色も、ともに法に従っているという意味で「如法衣」と称している。この法衣は同色の布をつなぎ合わせたもので、その合わせ目が重なるために縁が濃くみえて別布のように思われるが、縁には別布を使用されていない。この縫い方は、縁の一方は縫いつけるが、もう一方は所々縫い止めるだけで開いたままにして仕立てたので、これを開葉という。如法衣の場合は単衣仕立である。

## 船宿寺における花供養法要と柴燈護摩供養の僧服について

「甲袈裟」というのは納衣の一種で、縁（条葉）と甲とがあり、縁は黒で田相の部分に甲といい、その甲の色相によって名称がつけられている。

「糞掃衣」というのは納衣の一種で、人のいやがる捨てたぼろ裂をよせ集めて綴り合せて作った衣という意味である。

この時代の袈裟の素材は、野蚕の絹、木綿、羊毛、麻、鳥毛等を使用しておりバラエティに富んでいたが、立派な織物は禁じられていた。

袈裟の着装は偏袒右肩といって左肩に覆い右肩を露わにするのが通常の姿であるが、説法する時には通肩といって、両肩をまとうようになっている。右肩には釈迦如来がおられるということで、右肩があけられているのである。

また一風変わった袈裟として、結袈裟があるが、これについては後述（2・4－3 修験者の山伏たち）する。

延暦13年（794）桓武天皇が都を平安京に移した。平安初期には唐から新仏教として、天台・真言両宗が最澄・空海によって伝えられた。奈良朝における仏教は渡来人である唐僧によって教導されたのに反し、平安時代では日本人の僧侶がその中心になった。平安時代は、その初期の一時期を除いて、あらゆる面において中国文化を離れた日本式の文化が樹立された時代であった。それは、文学においては「かな」の創案であり、仏教においては、日本の古俗である神道に融合され、神道の中に仏教理念を展開し、仏教の中に神道を見出したことであり、僧侶の服装においては、インド以来の伝統であり仏教そのものの基本的不可欠であると考えられていた正色、たとえば壊色でなければならない三衣でも、仏教の日本化のために破って日本古伝の尊ぶ白に変えるなどの変化がみられ、奈良時代の唐代そのままのような姿は影をひそめた。

平安中期の仏教界は、加持祈禱<sup>7)</sup>などの仏事により皇室、藤原氏の厚い支持を受けることによって、国家の行う年中行事にも仏事が多く取り入れられ、貴族社会における仏教行事が広く普及する機縁となった。このような時代情勢の中で僧侶の社会的地位が格段と高くなった。

この時代の僧服の特徴は、平安朝に創作された法衣、たとえば養老の衣服令の礼服の系列を引く袍裳・袈代・白の鈍色・素絹などが広く用いられたことである。

これらは、国家の仏教を司祭する官僧の衣服としての性格をおびてきた。奈良時代にも一部には官衣として礼服の法衣化は見られたが、この時代は更に進展し、日本式の法衣制がほぼ完成された時代といっても過言ではない。したがって、俗服であった朝服が法衣として採り入れられたのである。これは俗服の法衣化といえるであろう。

「袍裳」(図8)とは法服ともいわれ、法衣として最高の儀式服である。袍裳の形式は官服であれば束帯に当るものである。袍裳は同色同裂の織物や綾地、あるいは夏は薄物で有紋である。その構成は、袍、裳、裃、単、下襲(大帷)、表袴、大口、帯、襪、檜扇、数珠、

浅沓となっている。袍の襟は僧綱襟といわれる広襟を頭の背後で方位にした形式、これは本来僧綱職にのみ許されている。これに七条袈裟および横被と修多羅で吊してかける。天台宗では探題職になると、白又は縹の帽子(もうす)を頭からつけることが許されている。真言系ではこのことを賜袖といい、これについては後述(2・4-1 導師)する。

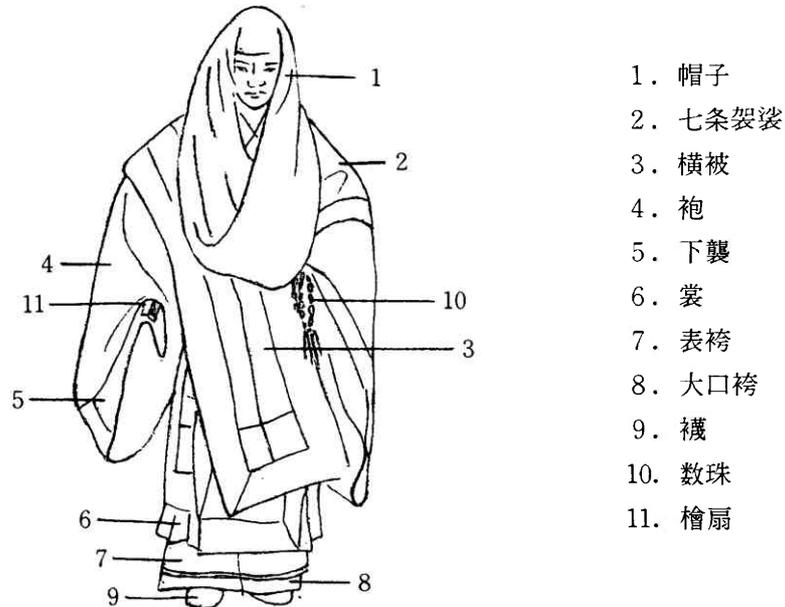


図8 僧侶の袍裳七条袈裟姿

「袈代」(図9)とは法皇、法親王の料として定められたもので、宿装束又は大袈代と呼ばれ、「最高の礼服」として扱われたものである。袈代の袍の形状の特長は文官の流れをくむ縫腋袍であり、腋が縫われており、欄には雨覆のあるものである。その素材は紋織で色有色である。袈代の下には、単、裃、大帷、指貫の下は下袴、襪沓、檜扇や数珠を持ち五条袈裟をつける。

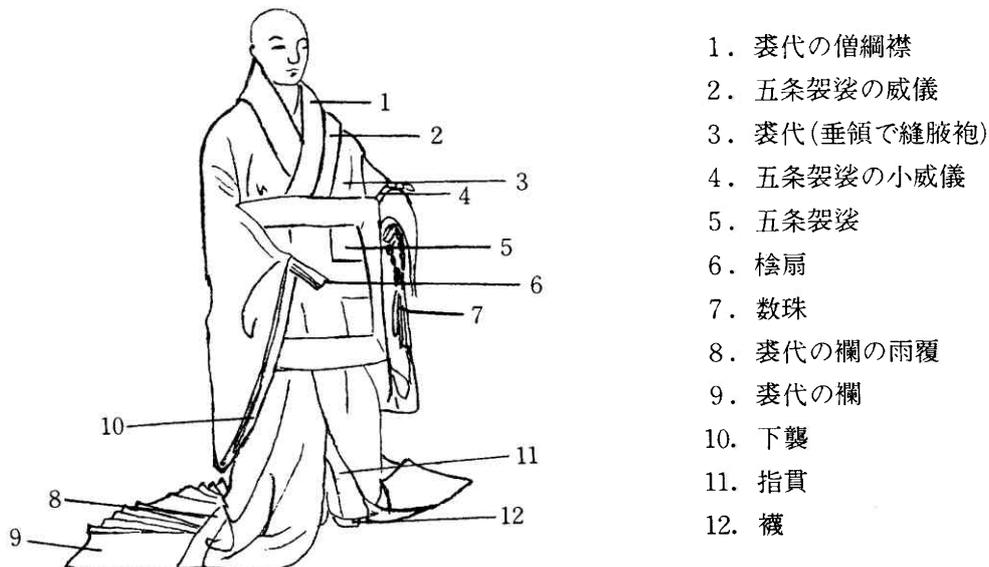


図9 法親王袈代五条袈裟姿

## 船宿寺における花供養法要と柴燈護摩供養の僧服について

「鈍色」(図10)とは無紋単衣の白の法衣で、神道的行事にふさわしいものとして仏教が日本古俗に融合し、前述したとおり仏教の日本化が成立した時に創案された。鈍色の法衣としての位置は袍裳の次位に属している。鈍色の着用次第は袍裳と同様であり、式正の時は表袴、七条袷袷を被着するのが本来であるが、袍裳より一段軽く着用する場合は指貫、五条袷袷が通常として用いられている。五条袷袷とは威儀紐と呼ぶ巾二巾ぐらいのくけ紐を用い、また両袖の上部に小威儀紐で結び合せて垂れさがるのを防ぎ、吊す形式の袷袷である。ここで、五条袷袷というのは、今日いわれているところの紋白の五条袷袷の意である。

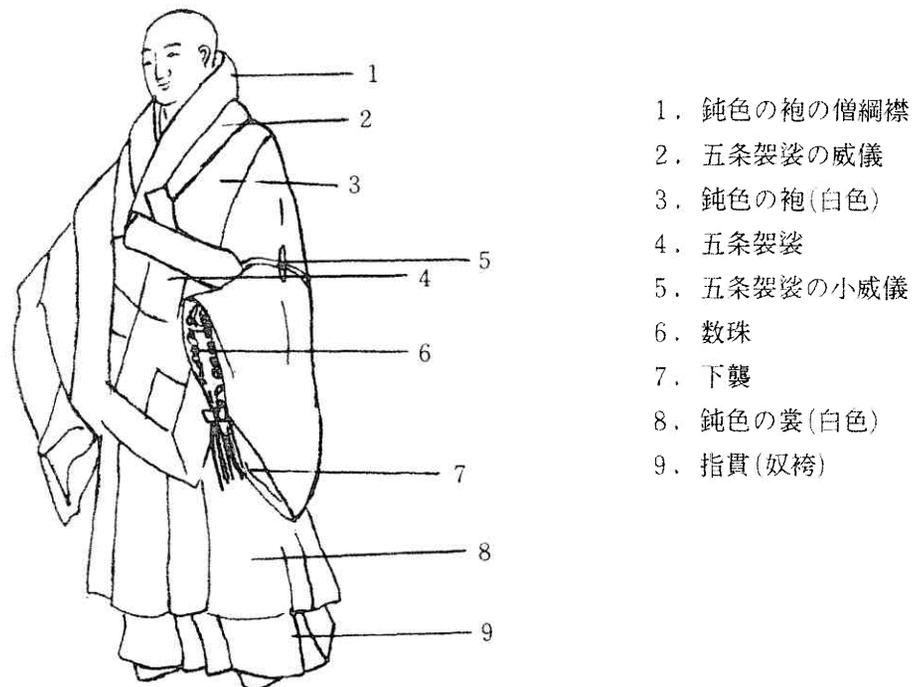


図10 僧侶の鈍色五条袷袷姿

「素絹」は、僧侶が国の祭祀の為参内するとき着用するため創案された。もともと素絹は村上天皇の頃(946~966)、天台宗の良源の時に勅許によって賜わったと云われている。このような経緯が示すように、素絹は天皇の御齊衣に極めて類似しているという点が挙げられる反面、相違点としては、御齊衣が盤領(あけくび)といって詰衿型(丸型)であるのに対して素絹は垂領(たれくび)といって着物の衿型となっている点が挙げられる。また、素絹は生絹、無紋で単衣仕立である。素絹の着用では下襲を用いず、公家と同様指貫をはく。

本来僧服は等身位のサイズであったものが、この時代に長素絹や袷代のように一身半にも及ぶものが現われ、法服の長大化が顕著に示されたことを一つの大きな特徴なことからして指摘することができる。反面、一般僧侶は素絹の長さを短くし、等身にして曳きずらないで着用出来る半素絹あるいは切素絹を被着していた。また、素絹に類したものとして、素絹の長さを短くした空袍(うつほ)・裳付などがあつた。

## 大手前女子学園（大手前女短大研集）「研究集録」第10号（1990年）

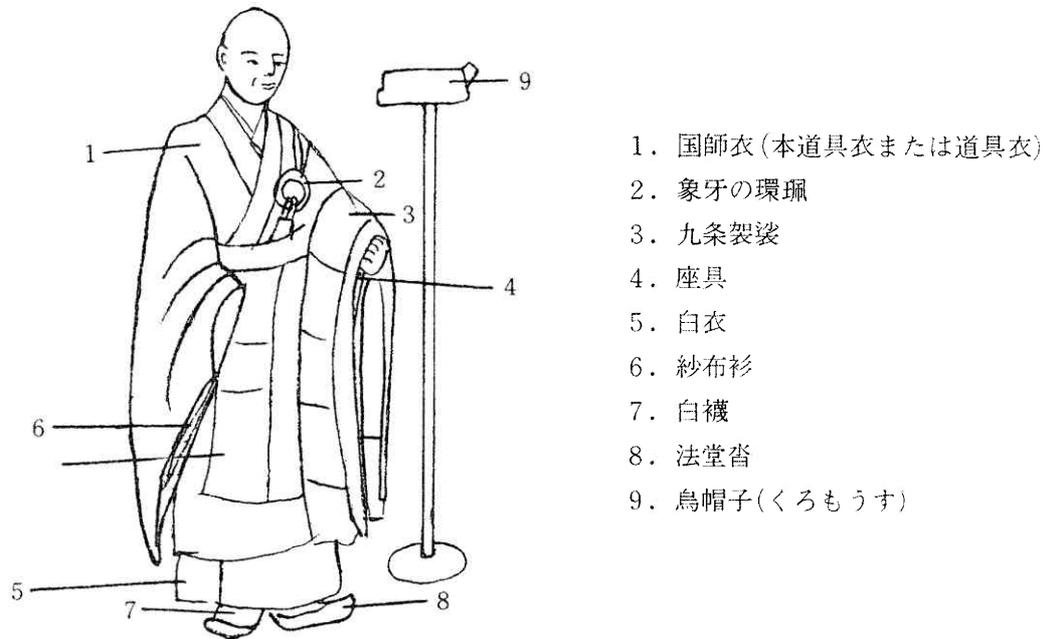
この時代には末法思想<sup>8)</sup>とともに阿弥陀信仰が盛んになり、極楽の世界を地上に現わそうとして、袈裟や衣にこの世のものと思われぬ美を求め、黄金珠玉や金銀によって飾られたものが流布するに致った。他方では、貴族化した仏教を離れて民衆に根ざそうとした聖（ひじり）と云う人達がいた。その人達の服装は空袍姿であった。この頃に修験の法衣は確立されたのであるが、これについては後述（2-4-3 修験者の山伏たち）する。

建久3年（1192）に源頼朝が征夷大將軍になり、鎌倉幕府を開いた。この時代は武家政治が確立された時代であり、封建制度の始まる時期である。鎌倉時代の仏教は、一言でいえば、平安時代の貴族仏教と末法思想に対しての反省の上に立っている。鎌倉時代の仏教は、歪められた日本の仏教を釈尊直流の仏教へと復古させようとする思想に基づいており、加持祈禱の思想に内的信仰の恢復をはかった。浄土宗、浄土真宗、時宗、日蓮宗の新興宗教が出現し、宋との交流によって栄西が臨済宗、道元が曹洞宗というように禅宗が伝来してきた。貴族的な平安仏教に対して、鎌倉仏教は武士・農民の宗教的要求を名号唱名という誰でもが実践できることによって満たそうとし、広く信者を得た。

この当時の僧服については、栄西・道元が入宋して新しい仏教を求め、法衣においてもほぼ完全に当時の宋代のまま伝えられた。それが禅衣である。天台・真言の平安朝に発展した教団の僧衣を教衣と呼称し、戒律による僧衣を律衣と呼称し、鎌倉時代に新たに渡来した禅宗の僧衣を呼称して禅衣という。禅衣には、袈裟・衣・襯身の衣が含まれる。禅衣が宋代仏教から移入したことは、鎌倉時代の法衣史を考える上で特記すべき事柄に挙げられる。また、法衣も当時の宋代の様式そのままを受け入れられたため、禅衣の「ころも」いわゆる直綴（じきとつ）は特別大きな袖巾と袖丈を特徴としている。直綴はその祖は褌衫、裙子であり、それがさらに中国の風土にとけこんで、中国古来の俗衣の影響を受けつつ形成された形、すなわち上衣（褌衫）と下衣（裙子）が腰のところで綴じ合わされて一枚の衣となったものである。この時の袈裟は二十五条ないし九条僧伽梨であり、大衣を常にまとい長さも長大になっていた。此頃中国から輸入された金襴の織物が袈裟に用いられるようになったが、それがいわゆる甲袈裟様式いわれるもので華麗さに特徴がある。臨済宗の袈裟の特徴は大きな修多羅を用いなくて単に飾り紐とし、また象牙の環珮（くわんぱい）で結んで、座具とともに用いるのを通常としたことである。さらに、絡子（らくす）または威儀細と呼ばれている袈裟の一種があるが、これは禅宗の伝来とともに導入された。絡子とは五条袈裟の一種で、二本の紐で吊して正しく前にかける。つぎに、道具衣についてであるが、中国の深衣の流れをくみ、時には完備した形状の直綴だけを呼称することもあるが、本来は以下に述べるものを被着して、初めてその名にふさわしいものになる。道具衣（図11）の構成は、烏帽子（くろもうす）、九条袈裟（左手の袈裟の下に座具）、国師衣（香色、本道具衣または道具衣）、紗布衫、平行帯、白襪、法堂沓、笏、払子、如意の一つを持つとなっている。道具衣には大腰に二本の飾り紐がつけられ法服として今日に及んでいる。その構成の中から座具、紗布衫、平行帯に説

## 船宿寺における花供養法要と柴燈護摩供養の僧服について

明を加える。「座具」とは礼拝のとき床に敷いて用いるもので、携行の際は左腕にかける。座具を携行するのは禅宗(臨濟・曹洞・黄檗)と禅衣の系統の法衣を用いる現在の時宗だけである。



1. 国師衣(本道具衣または道具衣)
2. 象牙の環珮
3. 九条袈裟
4. 座具
5. 白衣
6. 紗布衫
7. 白襪
8. 法堂沓
9. 烏帽子(くろもうす)

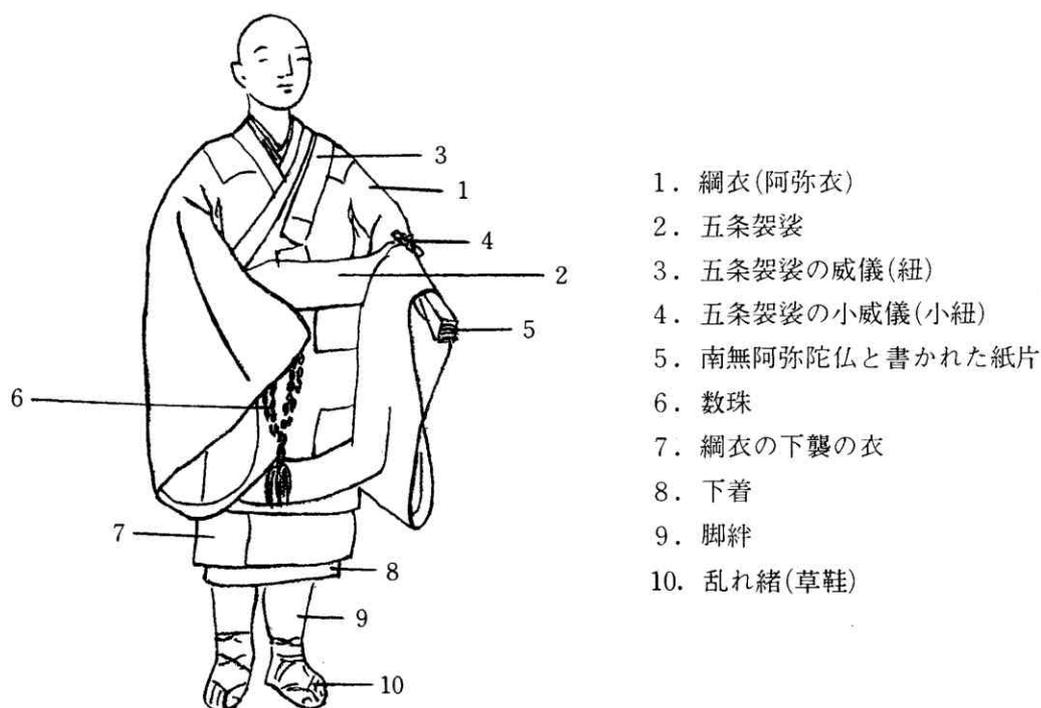
図11 僧侶の道具衣九条袈裟姿

「紗布衫」とは直綴の下着として用いるもので、形は直綴の腰から上だけからなり、通常麻地、単衣、時には袖衫といわれる襲(かさね)を袖口につける。公家服装の袍の下にかさねる下襲と同じ用途である。

「平行帯」とは飾り帯で、通常は丸打の組紐が用いられ、胴をしめる部分と飾として垂れ下がった部分とで構成されている。

一方、一遍上人は貴族仏教を民衆のもとへ返えさんと、村から里へ、里から町へと念仏勧進の遊行を続け、浄土宗の流れをくむ念仏教団の時宗を興した。ここで、時宗の法衣は従来の中国的なまた、日本の貴族的な法衣を捨てて、庶民服を取り入れて裳の観念を排した。裳なし衣で粗雑な繊維のゆえに「綱衣」と呼ばれ、他の宗派からは法衣とは思えないと非難されているが、時宗の人達は却ってこれを阿弥衣と尊んだ。綱衣(図12)の着用次第は白の下着・綱衣・綱衣の下襲の衣・黒の帯・白の手巾・数珠・南無阿弥陀仏と書かれた紙片・脚絆・乱れ緒(草鞋)であり、黒の五條袈裟をつけている。

鎌倉幕府が滅び、後醍醐天皇を中心とする建武の新政と南北朝対立、そして足利尊氏の室町幕府へと時代が目まぐるしく移り変わり室町時代(1388年)が始まる。この時代は下剋上の世といわれ、実力競争の社会であり、実力のあるものが下から起きあがって上の者にとってかわることが出来る時代であった。公家から政権を奪取した武士の心の支えは、公家と共存していた平安朝の貴族仏教ではなく、新しく渡来した禅でなければならなかった。また、禅は公家に対しても世の新しい理念として受け入れられ、信徒数を増やした。



1. 綱衣(阿弥衣)
2. 五条袈裟
3. 五条袈裟の威儀(紐)
4. 五条袈裟の小威儀(小紐)
5. 南無阿弥陀仏と書かれた紙片
6. 数珠
7. 綱衣の下襲の衣
8. 下着
9. 脚絆
10. 乱れ緒(草鞋)

図12 綱衣(阿弥衣)をつけた時宗の僧

その影響もあって武家・公家の支配者層は、禪衣に似た服装、たとえば、宿直服、直垂、大紋などが流行した。このような過程で禪衣の形態が確立したのである。従来「ころも」と呼ばれていたものは、裳・素絹であったが、室町時代には新様式の直綴を「からころも」（中国より渡来した法衣）と呼び、その全盛時代になったので「ころも」と言えばいわゆる「からころも」の直綴のことであった。

また一方、室町時代の初期には時宗の勢力が強く庶民層に深く根をおろし、前述したように法衣とはいえない難い裳なしの綱衣もみなおされた。しかし、中期には、時宗の衰退とともに、浄土真宗、日蓮宗がめざましく発展していく。つづいて室町時代の後期に、京都中心に富裕な商工業からなる町衆に深く根ざして行ったのは、日蓮宗(法華宗)であった。こうして、武家には禪、農村には浄土真宗、町衆には法華、芸能に時宗と大きな流れをみる事が出来る。また、僧服については、法華宗では法衣として天台・真言系の教衣の袍裳・素絹が着用され、浄土宗系では禪衣、時宗には綱衣というように着用されている。この頃の真言宗では直綴の着用はみられなかった。さらに芸能では、室町に完成した能楽は、時宗風の名を持つ観阿弥・世阿弥の二大天才の出現によって、猿楽より出でてその地位を高めた。その舞台に用いる能楽の法衣は水衣といわれ、いわゆる正式な法衣でないが、時宗の綱衣が昇華していったものと見なせる。

1573年織田信長が足利義昭を追放してから安土桃山時代が始まる。この時代は海外発展と実力尊重の開放的な雰囲気にもち、豪華・雄大で仏教の影響の少ない現実的文化が、新興大名と都市、大商人の間で発達した。この時の僧服として足利時代より道服が用いら

## 船宿寺における花供養法要と柴燈護摩供養の僧服について

れていたが、茶道の大成したこの時代の千利休らによって多く着用された。

道服の着用者は仏教に帰依する在俗者の用うるものとして黒（または濃紺）、および賜色（緋、紫）以外の他の色が用いられる。道服の定義はしにくい、道服とは形はまったく直綴と同じく袖丈は長く、袖巾も広く、裳には襷があり腰から下についているが、直綴の素材は無紋の麻であるのに、道服の素材は有紋で絹となっており、夏には紋紗を通常としている。現在、道服という名で使用しているのは、真宗・大谷派である。さらに、小道服といって、道服の裳の両脇を糸でかがったものをいう。小道服は道服の簡略化されたものである。この小道服を着用しているのは、天台宗および真宗・興正寺派である。

1603年、徳川家康が征夷大将軍となって江戸幕府を開いたのが江戸時代のはじまりである。鎖国が始まるとともに、幕府はキリスト教を禁じ、やがて幕府には宗門改役がおかれ、全国民の戸籍を作成し、その管理を寺院に委ねるようになった。ここに民衆を掌握するという政治権力的施策による檀那寺・檀家の制度が成立し、仏教史以来の「国教化」が成立するに至った。時代は移って「民主国家」となった現在でもこの檀那寺・檀家の風習は権力云々ではない形態として生きている。このような制度によって江戸時代の社寺は完全に幕府の支配下におかれ、本寺を頂点とする本寺一末寺の階層的な末寺組織が作られそれを規制する法令も定められた。こうした外的圧力のもとで寺院においても、たとえば法会における着席順序や階位を示す僧服規定などによって、身分と階級の有差を明確にする制度が導入されて来た。鎖国体制下の時代にあつて、新宗派をたてたり、また新義異を唱えてならないと禁じられていたのにもかかわらず、黄襷宗の一宗だけが認められたことは特筆すべきことであつた。黄襷宗は中国人の明人隠元隆琦によって聞かれた。黄襷宗は山号・寺号をはじめ法衣・法会についても中国式が用いられた。法衣は明末清初の様式のもの日本に移入された。中国式では法衣は袈裟のことであり現在一般にいう法衣（ころも）は法服と呼んで区別している。黄襷宗の法衣は唐時代にあつた赤袈裟の伝統を残しており色彩は赤色が用いられ、撲葉を有し、裏には金一色の金襴がつけられていて、他宗派にはみられない様式である。また法服の形状は直綴と同様腰つぎがあり、裾の部分はひだではなく継目が左右の前身の衽の線一つ、その後身の一つあり、背面中央がわかれているのが特徴である。また、黄襷衣の中で最正装は開堂衣である。これは要するに裾の部分が完全に二重になっているということである。なお黄襷衣と開堂衣とも、袖大巾一巾半の大きさである。以上が黄襷宗における法衣の概要である。

この時代、「ころも」、「法衣」といえば一般的には直綴を指すが、わずかにある直綴を用いない代表的な寺は高野山古義真言一派<sup>9)</sup>や黄襷宗等である。この時代における僧服の素材について述べる。素材の織物は従来、中国から渡来の輸入品に依存していたが鎖国という政情のため、国内でまかなわなければならなくなり、主に京都の西陣織の技工の向上により高級な金襴織物が可能となった。したがって、法会には金襴の袈裟がさかんに用い

られるようになったのもこの時代である。

しかし、法会の儀式で着用する僧服は荘厳化するのに反し、僧侶個人の日常生活で着用する僧服は簡略化され、たとえば、金襴を輪にしてかけるような袈裟、改良された法衣などがあり、僧服の標識化が行なわれてくるのである。江戸後期には各宗派により僧侶の階級服装に関する報告書が、徳川幕府の寺社奉行に提出され、当時の各宗派の法衣は制度化された。

## 2・4 船宿寺における花供養法要と柴燈護摩供養の僧服について

### 2・4-1 導師

花供養法要を司る導師の法衣の着用次第(図13)は襦袢・白衣・素絹・石帯・白足袋・燕尾・檜扇・花籠となっている。袈裟には七条袈裟の金襴錦織の遠山紋様を用い、横被と数種

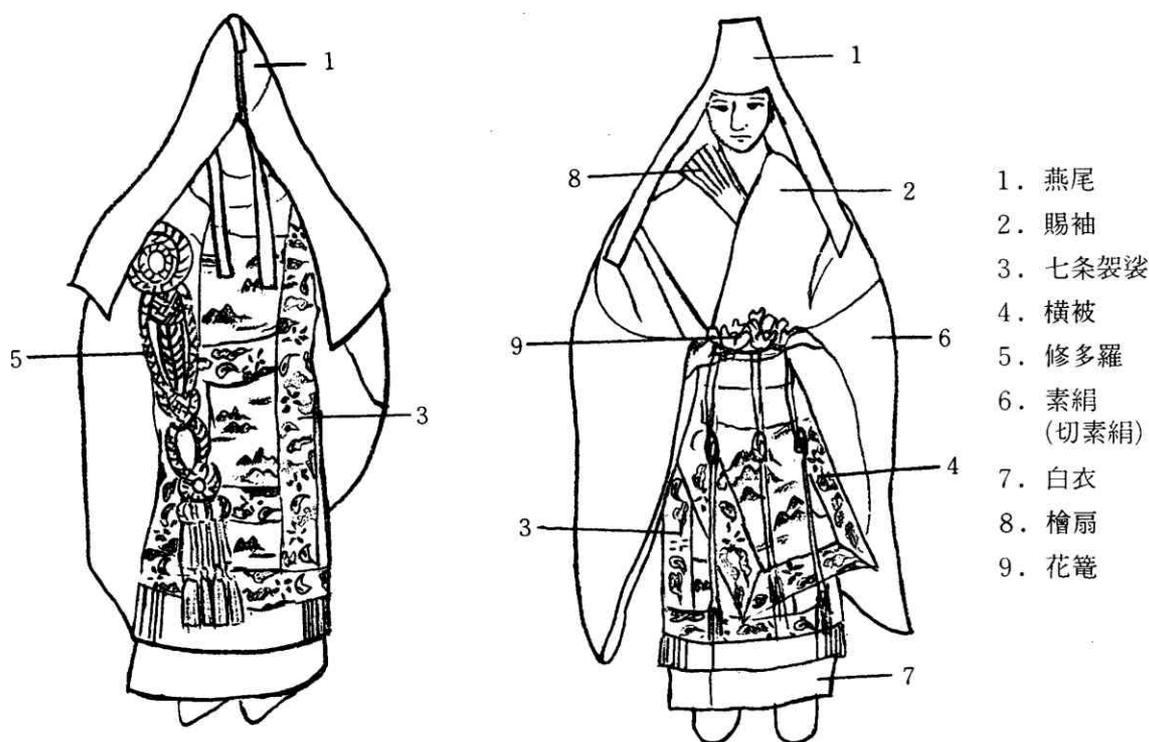


図13 導師

の糸で組まれた修多羅をつけている。さらに七条袈裟の上に白羽二重の賜袖を用いている。賜袖のいわれは、宗祖弘法大師が厳寒の修法の際着用するように嵯峨天皇より袖を賜ったということからきており、賜袖と称された。賜袖は七条袈裟の上に正服の著号の一つとして用いられている。日本仏教の儀礼<sup>10)</sup>には七条袈裟の遠山紋様は導師のみに被着が許されるという記載がある。

また、横被は七条袈裟と同様の裂地を用い、被着は右の肩に打ちかけ左の腋へと流しつける。横被は奈良時代には使用されていず、平安時代になって弘法大師請来<sup>11)</sup>乾陀穀系の七条被着されており、すべて七条袈裟には必ず横被を被着するということが、今日も真言宗にお

## 船宿寺における花供養法要と柴燈護摩供養の僧服について

いて継承されている。また船宿寺の花供養法要には被着されていないが、寺の最も古い行李には、一見フードの様な僧綱襟付の袍(図14)や裳(図15)、袴(図16)、七条袷袢(図17)、横被(図18)、修多羅(図19)、素絹等多数の僧服が所蔵されている。それらの僧服はいつ頃の時代のものかと調査してみると、当寺の住職の話と行李の中に入っている畳紙の書き付けとを総合すれば、これらはすべて明治時代のものであることが判明した。このような事実より推察すると、花供養法要が当寺で初めて営まれてから明治頃までは導師の法衣は、袍裳の礼服が被着されていたのではないかと推測される。明治以降においては、花供養法要では袍裳の代わりに素絹、襪の代わりに白足袋が被着され、袴は省略されていたようである。また、現在下着に被着される襦袢、白衣などは一般の着物と同じ物が用いられている。導師の法衣については、わずかではあるが簡略化の傾向がみられるものの、依然として伝統的かつ儀礼的な僧服の形が伝承されていることがわかった。

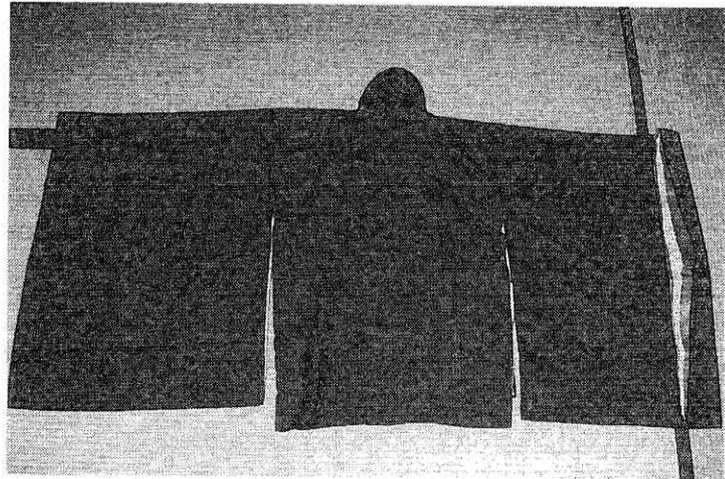


図14 フードの様な僧綱襟付の袍

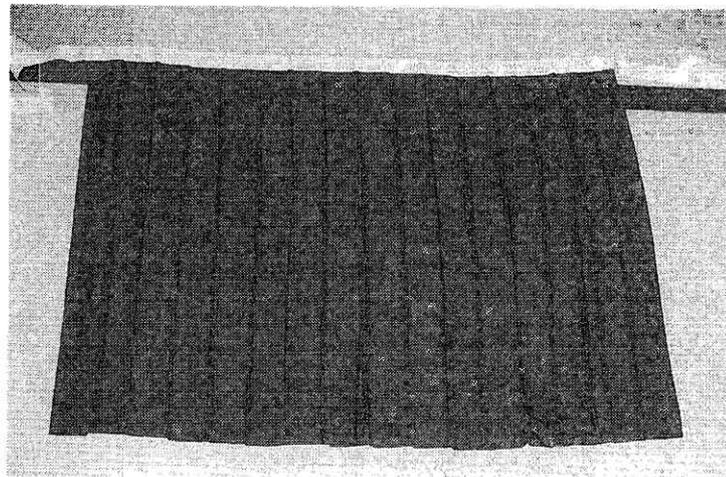


図15 裳



図16 袴

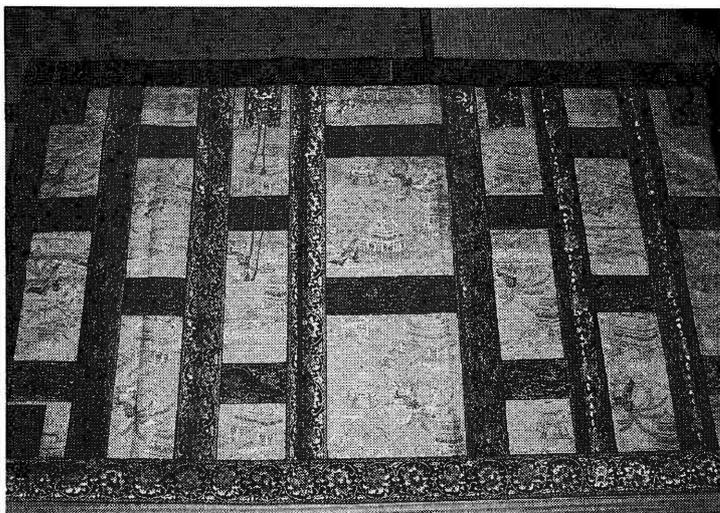


図17 七条袈裟

## 2・4-2 僧侶たち

僧侶たちの法衣(図20)は、主に素絹(図21)が用いられているが、褌衫・裙(図22)や直綴(図23)も好みにより被着されている。修業僧のみ空袍(図24)を着用している。

素絹は、真言宗においては平安の頃に天皇より賜衣として賜ったので、多くの僧侶たちが寺院の重要な法会には例外なく被着されているということである。平安の頃の素絹は裳裙を長く曳くので長素絹といい、また裳裙を等身に切りつめているものが切素絹と言われていたが、現在では一般的に長素絹と切素絹を区別なく素絹と呼称されている。ついで、法衣として中国において形成された褌衫・裙は、最古形式のまま現存している珍重すべき法衣である。現在もこの花供養において僧侶たちに褌衫・裙は着用されている。つぎに、直綴においては、鎌倉時代に禅宗の禅衣であったがため、江戸時代までは真言宗には直綴は用いられなかったが、近代に入り真言宗高野山派宗制<sup>12)</sup>の中の正衣に直綴が表示されており現代においては直綴も併用して用いられている。空袍は切素絹と同じく、等身にして曳きづらないように欄戈二つ折りにして被着されている。現在、空袍が着用され伝承されているのは、真言宗のみである。次に、僧侶達の法衣の色衣について述べると、真言宗(古義)高野山派宗制<sup>13)</sup>の中法衣被着の分限によれば、権少僧正以上は紫色となっている。当寺の花供養においても僧侶たちは織紋絹の紫を着用していた。宗制<sup>14)</sup>では空袍は本来墨(すみぞめ)と決めている。

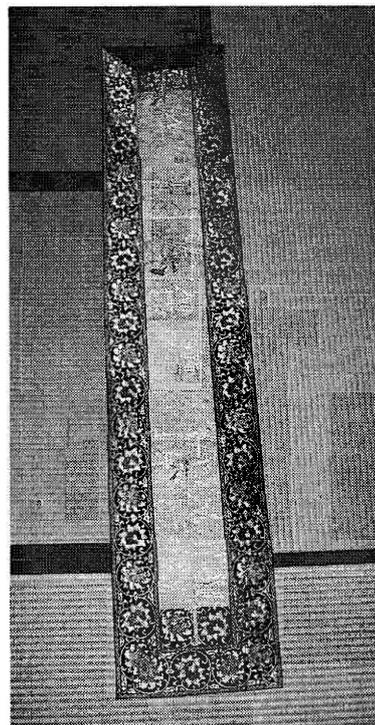


図18 横被

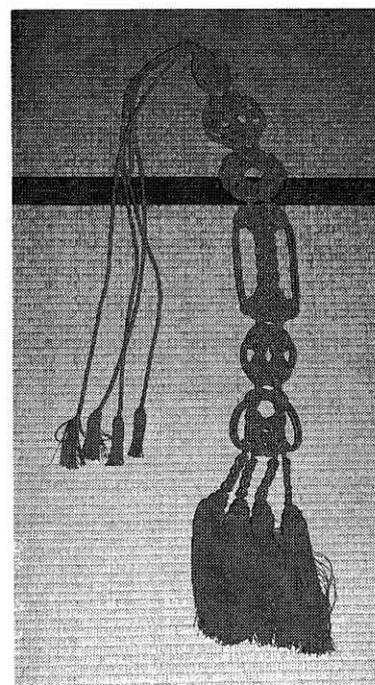


図19 修多羅

船宿寺における花供養法要と柴燈護摩供養の僧服について

僧侶たちの袈裟は、当寺の花供養では如法衣が被着されている。如法衣とは、律の定めにより縫製作法が定められた袈裟と言う意味である。通常如法衣と称する場合は、七条如法衣を指す。また、空袍を被着している修業僧の袈裟も如法衣が用いられている。したがって、僧侶たちの僧服は、その基本的な形態のまま維持され引きつぎ後世に遺されてゆくことになるのである。

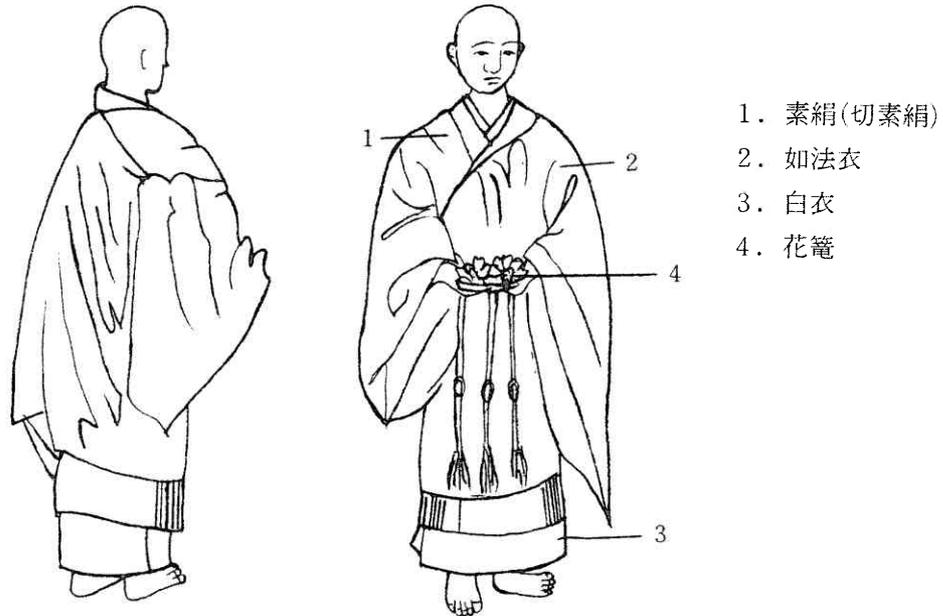


図20 僧侶たち

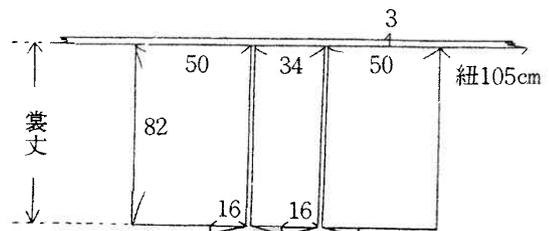
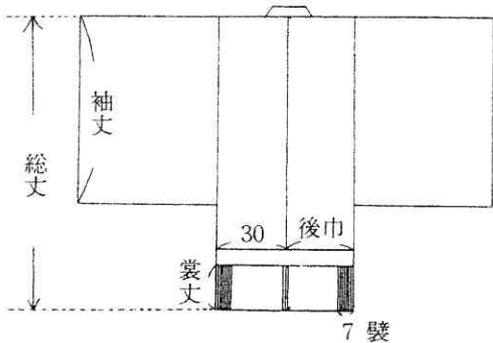
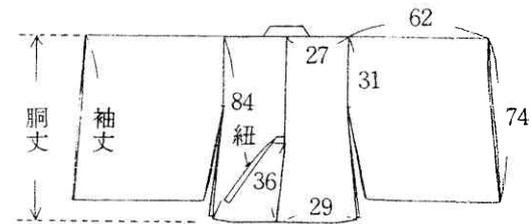
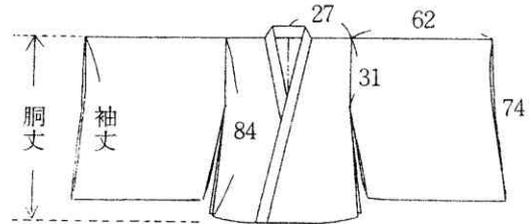
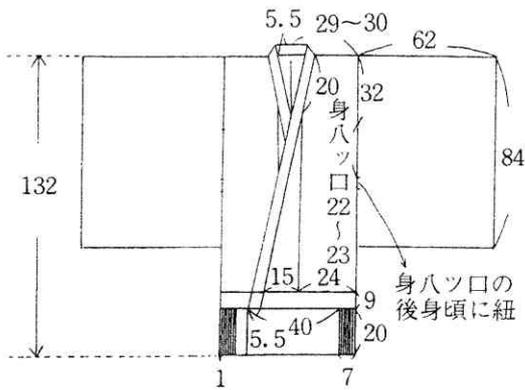


図21 素絹

図22 褌衫・裙

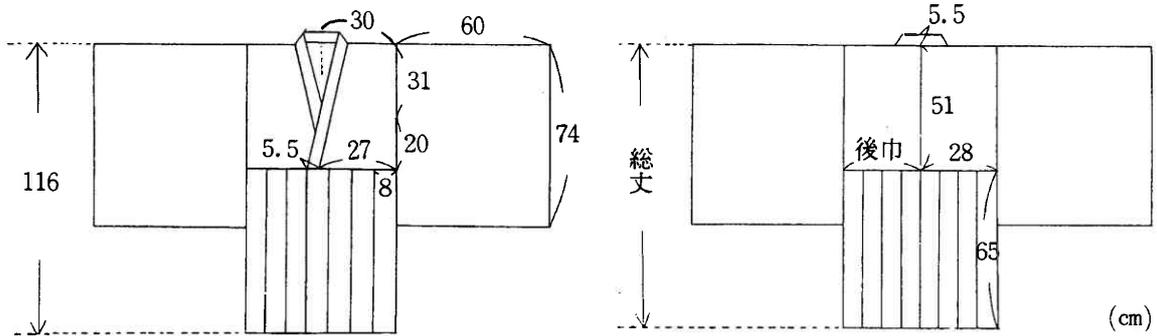


図23 直綴

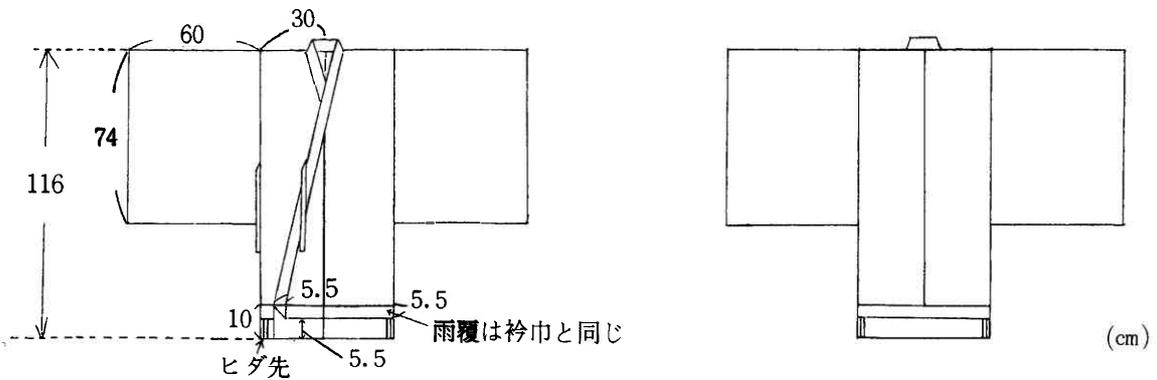


図24 空袍

2・4-3 修験者の山伏たち

柴燈護摩供養を行う修験者の山伏一行の着用次第 (図25) は頭に頭巾 (ときん)、身に鈴懸、袴は括り袴、結袷姿を佩び、尻り当ての引敷、白手甲、脚絆をつけ、草鞋をはき、走索、螺緒 (らお)、法螺貝を持っている。

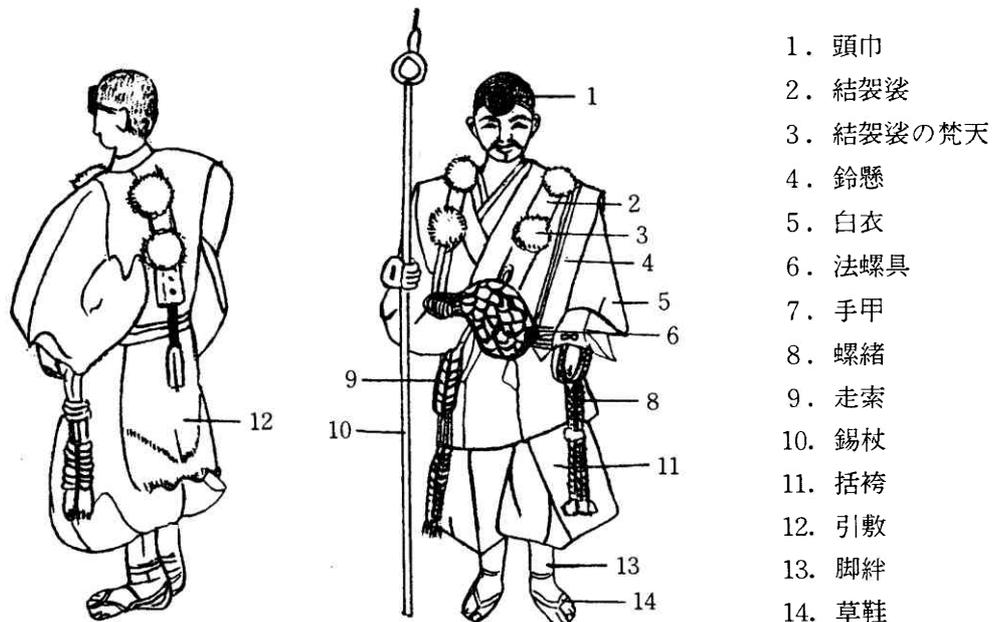


図25 修験者の山伏たち

## 船宿寺における花供養法要と柴燈護摩供養の僧服について

さらに、修験道に所用する法衣、法具の12種のうち旅行用の笠の飯蓋・念珠の修行のための数取り具の最多角念珠、読経の際の伴奏の錫杖（しゃくじょう）、修験の法文を入れた肩箱、修験の法具を納めて肩におうもの笈（おい）、旅のための金剛杖を身につけて、山野を跋涉して修法を行う。鈴懸は金剛界の九会の曼荼羅・括り袴は胎藏界の八葉曼荼羅を象徴しているといわれている。

結袈裟については、修験者が山野歩きや石山草木を運び、村を去って無人の境地におもむく特性上、独特の袈裟のつけ方がなされた。それは僧架梨である九条の袈裟をたたんで結び、肩から掛けるということである。結袈裟には、飾り房を梵天と称している。この六房は六波羅密を表わしている。

修験者の法衣と僧侶の法衣と比較すると、むしろ法衣というよりも、日本古来の在俗の服装に近いように感じられる。なぜならば鈴懸の形は日本古来の在俗の直垂の形と似ていて、修験の法衣と異なる所は、脇に別布を入れ襷になっていること等があげられ、直垂も上衣と下衣に分かれ下衣は括り袴であるからである。直垂は平安時代には宿直の時に着垂れる衣という意味で夜着を意味したものであったが、鎌倉時代に入ると一式に武士の常服となった。このように、同じ服装が時代の移り変わりによって着行動や着装階級が異なるということを考えれば、被服と時代背景という歴史の重みを痛感させられる。

奈良時代から平安時代にかけて修験者の法衣の形態が確立されたが、現在もほぼ同一の形が継承されている。

### 3 まとめ

僧服の変遷を時代的背景と共に考察しながら、船宿寺で現在営まれている花供養法要と柴燈護摩供養における僧服について類推して来た。政治・文化における時代の推移が激動している昨今にもかかわらず、僧服においては、伝統的そのままに近い形態で引き続き伝承されている。これは仏教の教義という深く大きな背景を無視することはできないであろう。調査を行った船宿寺ではたとえば、インドで成立し移入された袈裟の如法衣に、中国において形成された褌衫・裙、また平安時代の七条袈裟と横被と修多羅、平安時代に成立した素絹、奈良時代から平安時代に成立した修験者の法衣等、現在も花供養法要に被着されている。また、僧服の形態が定着する過程はまさに日本歴史の変遷史そのものといっても過言ではなく、政変や権力体制の波にさらされながら変化したものと、仏教行事の伝統に支えられて変化しなかった面が、知見できた。このことは、僧服の変遷の基盤では、仏教自体との深いつながりは勿論のこと、それに会処する仏教行事（法会）、それを支える僧侶・信仰者の存在なくしては語れない。それと共に時代背景として政治・経済・文化といった社会的要因が色濃く影響していることを知ることができた。

さらに、筆者は最近まで仏教における服飾の研究は、主として有職故実に基づくものと安易に考えていたが、この調査にあたり多くの文献や資料を紐といてみると、その考えは

## 大手前女子学園（大手前女短大研集）「研究集録」第10号（1990年）

浅くそれらの研究は歴史を踏まえ、社会生活・民俗習慣、また政治や儀式など様々な角度から把握されていることをあらためて認識した。今回の調査研究を機会に、身近な地方の祭礼の衣服や、記録されていない民族衣裳など、地域の慣習行事との関わりを調査、研究したいと願っている。なお、今回の調査では、江戸時代後期の各宗派の法衣についての変遷と、明治時代以降の法衣史についてはふれられなかった。他日にまとめたいと考えている。

## 謝辞

本研究を行うに当り、機会を与えていただきました福井秀加学長に深謝いたします。

また、貴重な資料を御提供くださり、種々の御助言を賜りました船宿寺の住職菅原正光氏に謹んで御礼を申し上げます。

## 文献

- 1) 瀬戸内寂聴ほか：仏教行事歳時記、4月（花祭り）、第一法規KK、(1989).
- 2) 大山公淳：真言宗法儀解説、東方出版（1981）.
- 3) 服部如実：柴燈護摩次第、神変社、(1974).
- 4) 井筒雅風：法衣史、雄山閣、(1982).
- 5) 井筒雅風：袈裟史、雄山閣、(1982).
- 6) 井筒雅風：原色日本服飾史、光林社出版、(1982).
- 7) 新居祐政：高野山真言宗檀信徒必携、高野山真言宗教学部、(1988).
- 8) 岩野真雄：佛教辞典、大東出版社.
- 9) 井筒雅風：法衣史、雄山閣、(1982).
- 10) 藤井正雄：日本仏教の儀礼—その形と心—桜楓社、(1983).
- 11) 井筒雅風：袈裟史、雄山閣、(1982).
- 12) 井筒雅風：法衣史、雄山閣、(1982).
- 13) 井筒雅風：法衣史、雄山閣、(1982).
- 14) 井筒雅風：法衣史、雄山閣、(1982).

## 資料

- 注1) 徳光禅師 奈良県南葛城郡史
- 注2) 具足戒 サンスクリットの〈ウパサンパダー〉upasampadaの漢訳。仏教の出家教団（僧伽）に入るときの試験をいう。原則としてだれでも僧（比丘（びく））になることが許されるが、しかしつぎの場合に限って入団許可は得られない。たとえば20才に満たない者、父母の許しを得ない者、負債のある者等、20種ほどの場合がある。
- 注3) 薬師瑠璃光如来 東方に想像される極楽世界である浄瑠璃世界の教主である仏。万病を治癒し人の寿命を延ばすことを本願とする仏として信仰されている。
- 注4) 巖船明神 その土地の守神でおそらく自然崇拜の中での山の神として起って来た。
- 注5) 観世音菩薩 梵語アヴァロキテシュヴァラAvalokitesvaraの漢訳。世に光を与える名（音）の持主を意味する光世音、なやめる衆生（世）をみそなわす人を意味する観世音、いずれも菩薩の慈悲を代表する名である。
- 注6) 結界 寺社などの宗教的空間の境域を定めること。その内部においては、宗教的機能が充分にはたらくことができるようにするためのタブー（禁忌）を守らねばならないとされていた。魔障などの侵入を防止するために行われる結界の修法や、注連縄（しめなわ）や

船宿寺における花供養法要と柴燈護摩供養の僧服について

結界石による区切りの表示がなされ、外界との区分けがなされる。

注7) 末法思想 釈迦の死後1500年（最初500年が正法の時、次の千年が像法の時）を経後一万年間といわれ、仏の教えがすたり教法のみが残る時代を指すのである。